

## ジャン＝レオン・ジェローム《アウグストゥスの時代》再考

—同時代批評と美術政策を踏まえて

齊藤大貴(國學院大學)

ジャン＝レオン・ジェローム(1824-1904)は、画家としてのデビュー時に、新ギリシア派(Néo-grec)と呼ばれるグループに属していた。新ギリシア派とは、ポール・ドラロッシュとシャルル・グレルの門下生によって結成され、パリを中心に1847年から63年まで活動したグループである。

本発表では、ジェロームが新ギリシア派と目されていた時期に発表した《アウグストゥスの時代》(1855)を取り上げる。1855年のパリ万国博覧会に展示された本作は、ジャック＝ベニーニュ・ボシュエ著『世界史序説』(1681)の一節を絵画化したものであり、皇帝アウグストゥスの治世下に世界の平和が樹立され、同時にキリストが降誕する場面を描いている。

この歴史画は、しかし、エドモン・アブーなどの新ギリシア派の作品に好意的であった批評家に失望感を与えた。批評家たちは、ジェロームに歴史画ではなく、新ギリシア派特有の風俗画を期待していたのである。本発表の目的は、これまでのジェローム研究において、詳細な分析がなされていない本作を、19世紀フランス美術の多様化を最もよく反映した作品として再評価することである。

19世紀における美術の多様化は、七月王政期に始まる。既に指摘されているように、七月王政期を代表する中庸派の画家は、分かりやすい主題を選び、歴史的考証を基に事物の細部を正確に再現した歴史画を制作することで、歴史画と風俗画の境界を曖昧にし、折衷的な作品が多く制作される流れを作った。新ギリシア派もこの流れに属し、古代ギリシア・ローマを舞台にしながらも、従来の新古典主義の歴史画ではなく、古代の日常生活などの親しみやすい主題を扱った風俗画を制作し、新しい分野を開拓した。

《アウグストゥスの時代》が多様化の時代を象徴するパリ万博に出展されたことの意味は大きい。まず本作は、古代ローマによる平和とキリストの降誕を同一画面に描き、皇帝による帝政の正当性を称える主題と宗教的テーマを組み込むという折衷的性格を持つ。そして作中の主要な構成要素である古代ローマ人、異民族、聖家族は、それぞれ全く異なる筆致によって表現されている。ジェロームは、異なる画風を組み合わせ、三者を描き分けているのである。特に聖家族は、1853年から54年に制作された油彩エスキスと比較すると、敢えてナザレ派に類似した画風に変更されている。また本作とエスキスとを比較することで、エスキスの段階で既にジェロームに折衷的な方法で、本作を描く意思があったと推測できる。いかなるモチーフが選択され、あるいは変更されたかを詳細に分析する必要がある。また本作と類似した、顕彰の対象となる人物を頂点に、その周囲に複数の人物を一堂に集めて描いたアングルの《ホメロスの神格化》(1827)やドラロッシュの壁画《大芸術家たちの集い》(1836-41)などの先行する作品との比較を通じ、本作が19世紀フランス美術の多様化を具現した大作であることを明らかにする。